2 麦類

(1) 要 旨

ア 作付面積

平成27年産4麦（小麦、二条大麦、六条大麦及びはだか麦）の子実用作付面積は27万4,400haで、前年産に比べ1,700ha（1%）増加した（表2-1、図2-1）。

イ 収穫量

平成27年産4麦の子実用収穫量は118万1,000tで、前年産に比べ15万9,000t（16%）増加した（表2-1、図2-1）。

表2-1 平成27年産4麦（子実用）の作付面積、10a当たり収量及び収穫量

<table>
<thead>
<tr>
<th>区 分</th>
<th>作付面積</th>
<th>10a当たり収量</th>
<th>収穫量</th>
<th>前年産との比較</th>
<th>（参考）</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>全国</td>
<td>四麦計</td>
<td>274,400</td>
<td>1,181,000</td>
<td>1,700</td>
<td>101</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>小麦</td>
<td>213,100</td>
<td>471,000</td>
<td>500</td>
<td>100</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>二条大麦</td>
<td>37,900</td>
<td>299,000</td>
<td>113,300</td>
<td>500</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>六条大麦</td>
<td>18,200</td>
<td>287,000</td>
<td>52,300</td>
<td>900</td>
</tr>
<tr>
<td>はだか麦</td>
<td>5,200</td>
<td>217</td>
<td>11,300</td>
<td>△ 50</td>
<td>99</td>
</tr>
<tr>
<td>北海道</td>
<td>四麦計</td>
<td>124,200</td>
<td>737,000</td>
<td>△ 1,000</td>
<td>99</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>小麦</td>
<td>122,600</td>
<td>596</td>
<td>731,000</td>
<td>△ 800</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>二条大麦</td>
<td>1,640</td>
<td>397</td>
<td>6,510</td>
<td>△ 100</td>
</tr>
<tr>
<td>はだか麦</td>
<td>12</td>
<td>367</td>
<td>44</td>
<td>4</td>
<td>150</td>
</tr>
<tr>
<td>都府県</td>
<td>四麦計</td>
<td>150,100</td>
<td>443,600</td>
<td>2,600</td>
<td>102</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>小麦</td>
<td>90,500</td>
<td>302</td>
<td>273,200</td>
<td>△ 1,300</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>二条大麦</td>
<td>36,300</td>
<td>294</td>
<td>106,800</td>
<td>500</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>六条大麦</td>
<td>18,200</td>
<td>287</td>
<td>52,300</td>
<td>900</td>
</tr>
<tr>
<td>はだか麦</td>
<td>5,180</td>
<td>218</td>
<td>11,300</td>
<td>△ 60</td>
<td>99</td>
</tr>
</tbody>
</table>

注：1 「（参考）10a当たり平均収量対比」とは、10a当たり平均収量（原則として直近7か年のうち、最高及び最低を除いた5か年の平均値）に対する同年の10a当たり収量の比率である（以下各統計表において同じ）。2 全国、都府県及び全国農業地域別（以下「地域別」という。）の10a当たり平均収量は、都府県の10a当たり平均収量に当年産の作付面積を乗じて求めた平均収穫量を地域別に積み上げ、当年産の地域別作付面積で除して算出している。ただし、地域別内の全ての都道府県の10a当たり平均収量がそろわない場合には作成しない（以下各統計表において同じ。）。3 北海道において、六条大麦の作付けは行われていない。
表2-2 平成27年産4麦（子実用）の作付面積、10a当たり収量及び収穫量（全国農業地域別）

<table>
<thead>
<tr>
<th>全農地域</th>
<th>4麦計</th>
<th>小麦</th>
<th>二条大麦</th>
<th>六条大麦</th>
<th>はだ麦</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>作付面積</td>
<td>ha</td>
<td>t</td>
<td>ha</td>
<td>kg</td>
<td>t</td>
</tr>
<tr>
<td>収穫量</td>
<td>lbs</td>
<td>t</td>
<td>lbs</td>
<td>kg</td>
<td>t</td>
</tr>
<tr>
<td>10a当たり収量</td>
<td>lbs</td>
<td>kg</td>
<td>lbs</td>
<td>kg</td>
<td>t</td>
</tr>
<tr>
<td>(参考)作付面積</td>
<td>ha</td>
<td>%</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>

| 全国    | 274,400 | 1,181,000 | 213,100 | 1,004,000 | 327 | 12,200 | 287 | 52,300 | 100 | 5,200 | 217 |
| 北海道  | 122,200 | 737,600 | 120,600 | 731,000 | 141 | 1,640 | 397 | 6,510 | 125 | -    | -   |
| 都府県  | 150,100 | 443,600 | 90,500 | 273,200 | 100 | 36,300 | 94  | 10,800 | 180 | 287 | 52,300 | 100 | 5,180 | 218 |
| 東北    | 8,240  | 19,500 | 7,040  | 190  | 346  | x   | 183  | 11  | 110  | x   | 110 |
| 北陸    | 10,400 | 29,300 | 182  | 299,000 | 112 | 6,510 | 100 | 287   | 52,300 | 100 | 5,180 | 218 |
| 北本 - 北山 | 38,400 | 143,600 | 20,800 | 79,600 | 115 | 12,400 | 381 | 47,200 | 112 | 5,140 | 218 |
| 東南    | 16,500 | 49,200 | 15,900 | 47,800 | 102 | 9,156 | 14  | 36,300 | 115 | 2,122 | 47,600 | 112 | 85  |
| 北陸    | 10,600 | 24,700 | 9,430  | 21,900 | 102 | 173  | 235  | 406  | 115 |
| 中南    | 5,140  | 13,200 | 2,020  | 252   | 5,100 | 95  | 2,830 | 257 | 7,290 | 76  |
| 四国    | 4,580  | 11,900 | 1,860  | 295   | 5,680 | 86  | 2,650 | 265 | 7,800 | 76  |
| 九州    | 56,000 | 152,300 | 33,300 | 51,800 | 108 | 5,800 | 14  | 50,800 | 117 |
| 沖縄    | 13     | 23    | 13     | 177   | 23   | 100  | -   | -    | -   |

図2-2 小麦の作付面積、収穫量及び10a当たり収量の推移（全国）

(2) 解 説

ア 小麦（子実用）

(ア) 作付面積

小麦の子実用作付面積は21万3,100haで、前年産とはほぼ同数であった。

このうち、北海道は12万2,600haで、他作物への転換等により、前年産に比べ800ha(1%)減少した。

一方、都府県は9万500haで、前年産に比べ1,300ha(1%)増加した。これは、東海、近畿地域等において他作物からの転換等により、増加したためである（表2-1、2-2、図2-2）。

(イ) 10a当たり収量

10a当たり収量は471㎏で、前年産に比べ17%上回った（表2-1、2-2、図2-2）。

a 北海道

10a当たり収量は596㎏で、前年産に比べ33%上回った。

これは、4月以降天候に恵まれ生育が良好であったことに加え、出穂期以降気温が低めに推移し、登熟期間が長く確保された等から10a当たり収量が過去最高となったためである（表2-1、2-2、図2-3）。

b 都府県

10a当たり収量は302㎏で、前年産に比べ10%下回った。
これは、東海以西において 4 月以降、曇雨天の日が続き、登熟が不良となったためである（表 2-1、2-2、図 2-4）。

(7) 収穫量
収穫量は100万4,000 t で、前年産に比べ15万1,600 t （18％）増加した。
このうち、北海道の収穫量は73万1,000tで、前年産に比べ17万9,600t （33％）増加した。
一方、都府県の収穫量は27万3,200tで、前年産に比べ2万7,800t （9％）減少した（表 2-1、2-2、図 2-2）。

図 2-3 平成27年産麦作期間の半旬別気象経過（帯広）
図 2-4 平成27年産麦作期間の半旬別気象経過（福岡）
イ 二条大麦（子実用）

（ア）作付面積

二条大麦の子実用作付面積は3万7,900haで、前年産に比べ300ha（1％）増加した。このうち、北海道は1,640haで、前年産と比べ100ha（6％）減少した。一方、都府県は3万6,300haで、関東・東山地域等において減少したものの、九州地域等において増加したため前年産に比べ500ha（1％）増加した（表2-1、2-2、図2-5）。

（イ）10a当たり収量

10a当たり収量は299㎏で、前年産に比べ4％上回った。これは、九州地域において、早熱期の降雨による発芽不良、低温日照不足等の影響により分けつけ抑制されたものの、関東地域において出穂期以降の天候がおおむね良好であったためである（表2-1、2-2、図2-5、2-6、2-7）。

（ウ）収穫量

収穫量は11万3,300tで、前年産に比べ5,100t（5％）増加した（表2-1、2-2、図2-5）。

図2-5 二条大麦の作付面積、収穫量及び10a当たり収量の推移（全国）

図2-6 平成27年産麦作期間の半旬別の気象経過（栃木）

図2-7 平成27年産麦作期間の半旬別の気象経過（福岡）
六条大麦（子実用）

(イ) 作付面積
六条大麦の子実用作付面積は1万8,200haで、前年産に比べ900ha（5%）増加した。これは、北陸地域等において他作物からの転換等があったためである（表2-1、2-2、図2-8）。

(ロ) 10a当たり収量
10a当たり収量は287㎏で、前年産に比べ6%上回った。これは、関東地域において出穂期以降の天候がおおむね良好であったためである（表2-1、2-2、図2-8、2-9、2-10）。

(ハ) 収穫量
収穫量は5万2,300tで、前年産に比べ5,300t（11%）増加した（表2-1、2-2、図2-8）。
はだか麦（子実用）

（7） 作付面積
はだか麦の子実用作付面積は5,200haで、前年産に比べ50ha（1%）減少した（表2－1、2－2、図2－11）。

（8） 10a当たり収量
10a当たり収量は217㎏で、前年産に比べ21%下回った。
これは、愛媛県や大分県において、はだか麦の子実用作付面積、前年産に比べ50ha（1%）減少した（表2－1、2－2、図2－11、2－12、2－13）。

（9） 収穫量
収穫量は1万1,300tで、前年産に比べ3,200t（22%）減少した（表2－1、2－2、図2－11）。
3 豆類・そば

（1）要旨
平成27年産の豆類（乾燥子実）の全国の収穫量は、大豆が24万3,100 tで、前年産に比べ1万1,300 t（5％）増加し、小豆が6万3,700 tで、前年産に比べ1万3,100 t（17％）減少した。いんげんは2万5,500 tで、前年産に比べ5,000 t（24％）増加した。らっかせいは1万2,300 tで、前年産に比べ3,800 t（24％）減少した。
また、平成27年産そばの収穫量は3万4,800 tで、前年産に比べ3,700 t（12％）増加した（表3）。

（2）解説
ア 大豆（乾燥子実）
（7）作付面積
平成27年産大豆の作付面積は14万2,000haで、前年産に比べ1万400ha（8％）増加した。
これは、水稲、小豆等からの転換があったためである（表3、図3-1）。

（1）10a当たり収量
10a当たり収量は171kgで、前年産に比べ3％下回った。
これは、関東地域において台風の影響により被害が発生したこと並びに東海以西において低温・日照不足等により生育及び登熟が抑制されたためである（表3、図3-1）。

（9）収穫量
収穫量は24万3,100 tで、前年産に比べ1万1,300 t（5％）増加した（表3、図3-1）。
イ 小豆（乾燥子実）

(7) 作付面積

平成27年産小豆の作付面積は2万7,300haで、前年産に比べ4,700ha（15％）減少した。

このうち、全国の約8割を占める北海道の作付面積は2万1,900haで、前年産に比べ4,400ha（17％）減少した（表3、図3－2）。

(イ) 10a当たり収量

10a当たり収量は233kgで、前年産に比べ3％下回った。

これは、主産地である北海道において、おおむね天候に恵まれ生育が良好であったため、作柄の良かった前年産を下回ったためである（表3、図3－2）。

(9) 収穫量

収穫量は6万3,700tで、前年産に比べ1万3,100t（17％）減少した（表3、図3－2）。

ウ いんげん（乾燥子実）

(7) 作付面積

平成27年産いんげんの作付面積は1万200haで、前年産に比べ940ha（10％）増加した。

このうち、全国の約9割を占める北海道の作付面積は9,550haで、前年産に比べ1,010ha（12％）増加した。

これは、小豆からの転換等があったためである（表3、図3－3）。

(イ) 10 a 当たり収量

10 a 当たり収量は250kgで、前年産に比べ13％上回った。

これは、主産地である北海道において、おおむね天候に恵まれ生育が良好であったためである（表3、図3－3）。

(9) 収穫量

収穫量は2万5,500tで、前年産に比べ5,000t（24％）増加した（表3、図3－3）。
エ らっかせい（乾燥子実）

(ア) 作付面積
平成27年産らっかせいの作付面積は6,700haで、前年産に比べ140ha（2%）減少した。
このうち、全国の約8割を占める千葉県の作付面積は5,240haで、前年産に比べ60ha（1%）減少した（表3、図3-4）。

(イ) 10a当たり収量
10a当たり収量は184㎏で、前年産に比べ22%下回った。
これは、主産地である千葉県において、7月下旬から8月上旬までの小雨の影響等により、さや数が抑制されたことに加え、空さやの発生が多かったためである（表3、図3-4）。

(ウ) 収穫量
収穫量は1万2,300tで、前年に比べ3,800t（24%）減少した（表3、図3-4）。

オ そば

(ア) 作付面積
平成27年産そばの作付面積は5万8,200haで、前年産に比べ1,700ha（3%）減少した。
これは、他作物への転換等があったためである（表3、図3-5）。

(イ) 10a当たり収量
10a当たり収量は60㎏で、前年産に比べ15%上回った。
これは、北海道において生育期間を通じておおむね天候に恵まれ、登熟が良好であったためである（表3、図3-5）。

(ウ) 収穫量
収穫量は3万4,800tで、前年産に比べ3,700t（12%）増加した（表3、図3-5）。
4 かんしょ

(1) 作付面積

平成27年産かんしょの作付面積は3万6,600haで、前年産に比べ1,400ha（4%）減少した。

これは、鹿児島県等において他作物への転換等があったためである（表4、図4）。

(2) 10a当たり収量

10a当たり収量は2,220kgで、前年産に比べ5%下回った。

これは、九州地域において6月から9月にかけての低温・日照不足等により、いもの肥大が抑制されたためである（表4、図4）。

(3) 収穫量

収穫量は81万4,200tで、前年産に比べ7万2,300t（8%）減少した（表4、図4）。

表4 平成27年産かんしょの作付面積、10a当たり収量及び収穫量

<table>
<thead>
<tr>
<th>区分</th>
<th>作付面積</th>
<th>10a当たり収量</th>
<th>収穫量</th>
<th>前年産との比</th>
<th>対差</th>
<th>対比</th>
<th>10a当たり平均収量</th>
<th>対差</th>
<th>対比</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>全国</td>
<td>36,600</td>
<td>2,220</td>
<td>814,200</td>
<td>△ 1,400</td>
<td>96</td>
<td>95</td>
<td>△ 72,300</td>
<td>92</td>
<td>94</td>
</tr>
<tr>
<td>茨城</td>
<td>6,700</td>
<td>2,470</td>
<td>165,500</td>
<td>20</td>
<td>100</td>
<td>95</td>
<td>△ 7,500</td>
<td>96</td>
<td>94</td>
</tr>
<tr>
<td>千葉</td>
<td>4,240</td>
<td>2,480</td>
<td>105,200</td>
<td>△ 50</td>
<td>99</td>
<td>98</td>
<td>△ 3,300</td>
<td>97</td>
<td>98</td>
</tr>
<tr>
<td>静岡</td>
<td>661</td>
<td>1,620</td>
<td>10,700</td>
<td>△ 40</td>
<td>94</td>
<td>95</td>
<td>△ 1,200</td>
<td>90</td>
<td>98</td>
</tr>
<tr>
<td>徳島</td>
<td>1,130</td>
<td>2,320</td>
<td>26,200</td>
<td>0</td>
<td>100</td>
<td>97</td>
<td>△ 900</td>
<td>97</td>
<td>95</td>
</tr>
<tr>
<td>香川</td>
<td>1,070</td>
<td>2,220</td>
<td>23,800</td>
<td>△ 30</td>
<td>97</td>
<td>98</td>
<td>△ 1,200</td>
<td>95</td>
<td>98</td>
</tr>
<tr>
<td>鳥取</td>
<td>5,440</td>
<td>2,470</td>
<td>85,000</td>
<td>△ 150</td>
<td>96</td>
<td>94</td>
<td>△ 9,100</td>
<td>90</td>
<td>95</td>
</tr>
<tr>
<td>島根</td>
<td>12,400</td>
<td>2,380</td>
<td>295,100</td>
<td>△ 1,000</td>
<td>93</td>
<td>95</td>
<td>△ 41,200</td>
<td>88</td>
<td>91</td>
</tr>
</tbody>
</table>

注：かんしょの収穫量調査は主産県調査であり、3年周期で全国調査を実施している。平成27年産については主産県を対象に調査を行った。なお、全国値は、主産県調査結果と主産県以外の推計値を合算したものである。
5 飼料作物

(1) 牧草

ア 作付（栽培）面積

全国の牧草の作付（栽培）面積は73万7,600haで、前年産並みであった（表5-1、図5-1）。

イ 10a当たり収量

全国の牧草の10a当たり収量は3,540kgで、前年産に比べ4%上回った。

これは、九州地域において低温、日照不足等の影響により生育が抑制されたものの、北海道等においておおむね天候に恵まれ生育が順調であったこと等による（表5-1、図5-1）。

ウ 収穫量

全国の牧草の収穫量は2,609万2,000tで、前年産に比べ89万9,000t（4%）増加した（表5-1、図5-1）。

表5-1 平成27年産牧草の作付（栽培）面積、10a当たり収量及び収穫量

<table>
<thead>
<tr>
<th>区分</th>
<th>作付（栽培）面積</th>
<th>10a当たり収量</th>
<th>収穫量</th>
<th>前年産との比較</th>
<th>10a当たり収量</th>
<th>収穫量</th>
<th>10a当たり平均収量</th>
<th>平均収量</th>
<th>10a当たり平均収量</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>全国</td>
<td>737,600</td>
<td>3,540</td>
<td>26,092,000</td>
<td>△ 2,000</td>
<td>100</td>
<td>104</td>
<td>899,000</td>
<td>104</td>
<td>99</td>
</tr>
<tr>
<td>うち北海道</td>
<td>540,500</td>
<td>3,340</td>
<td>18,053,000</td>
<td>△ 1,000</td>
<td>100</td>
<td>104</td>
<td>617,000</td>
<td>104</td>
<td>102</td>
</tr>
</tbody>
</table>

注：飼料作物の収穫量調査は主産県調査であり、3年周期で全国調査を実施している。平成27年産については主産県を対象に調査を行った。なお、全国値は、主産県調査結果と主産県以外の推計値を合算したものである。
（2）青刈りとうもろこし

ア 作付面積

全国の青刈りとうもろこしの作付面積は9万2,400haで、前年産に比べ500ha（1%）増加した（表5-2、図5-2）。

イ 10a当たり収量

全国の青刈りとうもろこしの10a当たり収量は5,220kgで、前年産に比べ1%下回った（表5-2、図5-2）。

ウ 収穫量

全国の青刈りとうもろこしの収穫量は482万3,000tで、前年産並みであった（表5-2、図5-2）。

<table>
<thead>
<tr>
<th>区分</th>
<th>作付面積</th>
<th>10a当たり収量</th>
<th>収穫量</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>全国</td>
<td>92,400</td>
<td>5,220</td>
<td>4,823,000</td>
</tr>
<tr>
<td>北海道</td>
<td>51,300</td>
<td>5,610</td>
<td>2,878,000</td>
</tr>
</tbody>
</table>

表5-2 平成27年産青刈りとうもろこしの作付面積、10a当たり収量及び収穫量
（3）ソルゴー

ア 作付面積

全国のソルゴーの作付面積は1万5,200haで、前年産に比べ700ha（4%）減少した。

これは、他作物への転換等により減少したためである（表5-3、図5-3）。

イ 10a当たり収量

10a当たり収量は4,790kgで、前年産に比べ3％下回った。

これは、主に九州地域において、低温、日照不足等の影響により生育が抑制されたためである（表5-3、図5-3）。

ウ 収穫量

収穫量は72万8,600tで、前年産に比べ5万9,300t（8%）減少した（表5-3、図5-3）。

表5-3 平成27年産ソルゴーの作付面積、10a当たり収量及び収穫量

<table>
<thead>
<tr>
<th>区 分</th>
<th>作付面積</th>
<th>10a当たり収量</th>
<th>収穫量</th>
<th>前年産との比較</th>
<th>作付面積</th>
<th>10a当たり収量</th>
<th>収穫量</th>
<th>10a当たり収量の推移（全国）</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>全国</td>
<td>15,200</td>
<td>4,790</td>
<td>728,600</td>
<td>△ △</td>
<td>700</td>
<td>96</td>
<td>97</td>
<td>△ 59,300</td>
</tr>
</tbody>
</table>
6 工芸農作物

（1）茶

ア 栽培面積
平成27年の茶の栽培面積は4万4,000haで、前年比で800ha (2%) 減少した（表6-1）。

イ 摘採実面積
主産県の茶の摘採実面積は3万5,600haで、前年産に比べ400ha (1%) 減少した（表6-2）。

ウ 生葉収穫量
主産県の茶の生葉収穫量は35万7,800tで、前年産に比べ1万6,200t (4%) 減少した。これは、九州地域において生育期間全般の天候不順により、生育が抑制されたこと等による（表6-2）。

エ 荒茶生産量
主産県の荒茶生産量は7万6,400tで、前年産に比べ3,700t (5%) 減少した。都府県別にみると、静岡県が3万1,800t (全国に占める割合は40%)、次いで鹿児島県が2万2,700t (同29%)、三重県が6,830t (同9%) となっている（表6-2、図6-1）。

表6-2 平成27年の摘採面積、10a当たり生葉収量、生葉収穫量及び荒茶生産量（主産県）

<table>
<thead>
<tr>
<th>区分</th>
<th>摘採面積 (ha)</th>
<th>10a当たり生葉収量 (kg)</th>
<th>生葉収穫量 (kg)</th>
<th>荒茶生産量 (t)</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td>一番茶</td>
<td>二番茶</td>
<td>一番茶</td>
</tr>
<tr>
<td>平成26年</td>
<td>36,000</td>
<td>82,400</td>
<td>1,040</td>
<td>437</td>
</tr>
<tr>
<td>27</td>
<td>35,600</td>
<td>81,300</td>
<td>1,010</td>
<td>431</td>
</tr>
</tbody>
</table>

対前年比 (%)

99 99 97 99 93 96 98 89 95 98 88

注：数値については、表示単位未満を四捨五入しているため、計算結果と内訳の計が一致しない場合がある。

平成27年の茶の栽培面積（全国）

平成27年栽培面積：4万4,000ha

対前年比：98%

図6-1 荒茶生産量割合（主産県）
(2) なたね

ア 作付面積
平成27年産なたねの作付面積は1,630haで、前年産に比べ160ha（11％）増加した（表6－3、図6－2）。

イ 10 a 当たり収量
10 a 当たり収量は194kgで、前年産に比べ60％上回った。
これは、北海道、青森県等の主産地において生育期間全般を通じて天候に恵まれ、登熟も良好であったためである（表6－3、図6－2）。

ウ 収穫量
収穫量は3,160 tで、前年産に比べ1,380 t（78％）の大幅な増加となった（表6－3、図6－2）。

<table>
<thead>
<tr>
<th>区分</th>
<th>作付面積</th>
<th>10 a 当たり収量</th>
<th>収穫量</th>
<th>前年産との比較</th>
<th>(参考)</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td></td>
<td>ha</td>
<td>kg</td>
<td>t</td>
<td>作付面積</td>
<td>10 a 当たり収量</td>
</tr>
<tr>
<td>全国</td>
<td>1,630</td>
<td>194</td>
<td>3,160</td>
<td>160</td>
<td>111</td>
</tr>
<tr>
<td>北海道</td>
<td>605</td>
<td>318</td>
<td>1,920</td>
<td>201</td>
<td>150</td>
</tr>
<tr>
<td>都府県</td>
<td>1,020</td>
<td>122</td>
<td>1,240</td>
<td>△ 40</td>
<td>96</td>
</tr>
</tbody>
</table>
(3) てんさい

ア 作付面積
平成27年産てんさいの作付面積は5万8,800haで、前年産に比べ1,400ha（2%）増加した（表6-4、図6-3）。

イ 10a当たり収量
10a当たり収量は6,680kgで、前年産に比べ8％上回った。
これは、生育期間を通じて天候におおむね恵まれ、根部の肥大が良好であったためである（表6-4、図6-3）。

ウ 収穫量
収穫量は392万5,000tで、前年産に比べ35万8,000t（10％）増加した（表6-4、図6-3）。

<table>
<thead>
<tr>
<th>区分</th>
<th>作付面積</th>
<th>10a当たり収量</th>
<th>収穫量</th>
<th>前年産との比較</th>
<th>(参考)</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td></td>
<td>ha</td>
<td>kg</td>
<td>t</td>
<td>%</td>
<td>%</td>
</tr>
<tr>
<td>北海道</td>
<td>58,800</td>
<td>6,680</td>
<td>3,925,000</td>
<td>1,400</td>
<td>102</td>
</tr>
</tbody>
</table>

図6-3 てんさいの作付面積、収穫量及び10a当たり収量の推移（北海道）

注：てんさいの作付面積及び収穫量調査は、北海道を対象に行っている。
(4) さとうきび

ア 収穫面積

平成27年産さとうきびの収穫面積は2万3,400haで、前年産に比べ50ha（2%）増加した（表6-5、図6-4）。

イ 10a当たり収量

10a当たり収量は5,380㎏で、5月から9月にかけて、相次ぐ台風の被害等があったものの、作柄の悪かった前年産に比べ6%上回った。

なお、昭和49年以降で5番目に低い水準となった（表6-5、図6-4）。

ウ 収穫量

収穫量は126万tで、前年産に比べ10万1,000t（9%）増加した（表6-5、図6-4）。

表6-5 平成27年産さとうきびの作型別栽培・収穫面積、10a当たり収量及び収穫量

<table>
<thead>
<tr>
<th>区分</th>
<th>栽培面積</th>
<th>収穫面積</th>
<th>10a当たり収量</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>夏植え</td>
<td>春植え</td>
<td>株出し</td>
<td>夏植え</td>
</tr>
<tr>
<td>全国</td>
<td>平成26年産</td>
<td>29,600</td>
<td>23,400</td>
</tr>
<tr>
<td>前年産との比較（％）</td>
<td>109</td>
<td>101</td>
<td>71</td>
</tr>
</tbody>
</table>

図6-4 さとうきびの収穫面積、収穫量及び10a当たり収量の推移

注：さとうきびの作付面積及び収穫量調査は、鹿児島県及び沖縄県を対象に行っている。
(5)こんにゃくいも（全国）

ア栽培面積・収穫面積

平成27年産こんにゃくいもの栽培面積は3,910ha、収穫面積は2,220haであった。

このうち主な産地である群馬県の栽培面積は3,390haで、前年産に比べ30ha（1％）増加し、収穫面積は1,930haで前年産に比べ80ha（4％）増加した。（表6-6、図6-5）。

イ10a当たり収量

10a当たり収量は2,760kgであった。

このうち主な産地である群馬県のこんにゃくいものの10a当たり収量は2,930kgで、前年産並みであった。（表6-6、図6-5）。

ウ収穫量

収穫量は6万1,300tであった。

このうち主産地である群馬県のこんにゃくいもの収穫量は5万6,500tで、前年産に比べ2,300t（4％）増加した（表6-6、図6-5）。

表6-6 平成27年産こんにゃくいもの栽培・収穫面積、10a当たり収量及び収穫量

<table>
<thead>
<tr>
<th>区分</th>
<th>栽培面積</th>
<th>収穫面積</th>
<th>収穫量</th>
<th>10a当たり収量</th>
<th>収穫率</th>
<th>平均収量</th>
<th>10a当たり平均収量</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td></td>
<td>ha</td>
<td>ha</td>
<td>t</td>
<td>kg</td>
<td>%</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>全国</td>
<td>3,910</td>
<td>2,220</td>
<td>61,300</td>
<td>nc</td>
<td>nc</td>
<td>nc</td>
<td>nc</td>
</tr>
<tr>
<td>主産県計</td>
<td>3,500</td>
<td>2,000</td>
<td>58,300</td>
<td>100</td>
<td>70</td>
<td>104</td>
<td>100</td>
</tr>
<tr>
<td>群馬</td>
<td>3,390</td>
<td>1,930</td>
<td>56,500</td>
<td>30</td>
<td>80</td>
<td>104</td>
<td>100</td>
</tr>
<tr>
<td>栃木</td>
<td>105</td>
<td>68</td>
<td>1,790</td>
<td>△19</td>
<td>△6</td>
<td>92</td>
<td>△120</td>
</tr>
</tbody>
</table>

注：こんにゃくいものの作付面積及び収穫量調査は主産県調査であり、3年周期で全国調査を実施している。平成27年産については全国の都道府県を対象に調査を行った。
(6) い（主産県）

ア 作付面積
主産県（福岡県及び熊本県）の「い」の平成27年産作付面積は701haで、前年産に比べ38ha（5％）減少した。

これは、他作物への転換等により減少したためである（表6－7、図6－6）。

イ 10a当たり収量
主産県の10a当たり収量は1,110㎏で、前年産に比べ19％下回った。

これは、2月上旬から3月上旬にかけての低温により、生育が抑制され茎数が少なくなったことに加え、6月以降の低温・日照不足等により茎の伸長が抑制されたためである（表6－7、図6－6）。

ウ 収穫量
主産県の収穫量は7,800tで、前年産に比べ2,300t（23％）減少した。

これは、作付面積の減少に加えて、10a当たり収量が前年産を下回ったためである（表6－7、図6－6）。

エ 畳表生産農家数及び畳表生産量
主産県の「い」の生産農家数は550戸で、前年産に比べ26戸（5％）減少した。

このうち、畳表の生産まで一貫して行っている畳表生産農家数は513戸で、前年に比べ47戸（8％）減少した。

なお、平成26年7月から平成27年6月までの畳表生産量は2,780千枚で、前年に比べ890千枚（24％）減少した（表6－7）。

表6－7 平成27年産「い」の作付面積、10a当たり収量、収穫量等（主産県）

<table>
<thead>
<tr>
<th>区分</th>
<th>生産農家数</th>
<th>作付面積</th>
<th>10a当たり収量</th>
<th>収穫量</th>
<th>前年産との比較</th>
<th>(参考)</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td></td>
<td>戸</td>
<td>ha</td>
<td>kg</td>
<td>t</td>
<td>%</td>
<td>%</td>
</tr>
<tr>
<td>主産県計</td>
<td>550</td>
<td>701</td>
<td>1,110</td>
<td>7,800</td>
<td>△38</td>
<td>95</td>
</tr>
<tr>
<td>福岡</td>
<td>14</td>
<td>14</td>
<td>1,180</td>
<td>165</td>
<td>0</td>
<td>100</td>
</tr>
<tr>
<td>熊本</td>
<td>536</td>
<td>687</td>
<td>1,110</td>
<td>7,630</td>
<td>△38</td>
<td>95</td>
</tr>
</tbody>
</table>

注: 1 「い」の収穫量調査は、福岡県及び熊本県を対象に行っている。
2 「い」生産農家数は、平成27年産の「い」の栽培を行った農家の数である。
3 畳表生産農家数は、平成26年7月から平成27年6月までに畳表の生産を行った農家の数である。
4 畳表生産量は、平成26年7月から平成27年6月までに生産されたものである。